



一般社団法人上田薬剤師会顧問

工藤 義房

取材／武田宏
文／及川佐知枝
撮影／木内博

なぜ、長野県の上田では
「かかりつけ薬局」が
根づいているのか。



MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

厳しい自然環境の土地で、当然のように 生まれた「かかりつけ薬局」。

2015年秋、厚生労働省が「患者のための薬局ビジョン」『門前』から『かかりつけ』、そして『地域』へ」を発表し、薬局は従来の門前薬局主流から、「かかりつけ薬局」への移行を迫られるようになった。ほとんどの薬局が方向転換の道を模索し始める中、実は、長野県の上田市、東御市、長和町、青木村からなる人口約20万人の上田地域（以下、上田）では、我が国で唯一、すでに本来の「医薬分業、面分業」が成功し、「かかりつけ薬局」のシステムが浸透している。なぜ、上田は、このような先進的で独自の道を歩むことができたのか。行政関係者の視察も数多いと聞くが、本誌でも遅ればせながら、その解を求めて現地を訪れた。取材先は、上田における薬剤師の歴史の生き字引とも言える、一般社団法人上田薬剤師会（以下、上田薬剤師会）顧問で元会長の工藤義房氏である。

『なぜ、上田が？』と問われれば、まず、風土の影響が挙げられるでしょう。千曲川がありますが、基本は四方を高い山に囲まれた盆地で、夏は暑く、冬は寒さが厳しいですが積雪が少ない。そのため降水量の少なさは日本でも3本の指に入ります。しかし、たいへんな不作に見舞われたことはありません。あちこちのため池をつくって備えていたおかげです。決して豊かな土地ではなかったけれど、それの人々はさまざまな工夫でカバーしてきました」

恵まれない環境にいる人は、なんとか現状を打開しようと、団結して知恵を出し合い、実行に移す。気軽になんでも相談できる「かかりつけ薬局」は、医師数が少ない地方においては、なんともありがたい存在だ。上田では、当たり前のように生まれたのだろう。

とはいえ、自然環境や人口などが上田と似たような条件の地方都市圏は全国に珍しくはない。当然だが、ほかにも独自路線を歩んでこられた理由があるはず。工藤氏に尋ねると、もうひとつの答えとして「教育」を挙げてくれた。長野県は、よく「教育県」と評されるが、薬剤師の領域においても同様のことが言えるようだ。

「私は、薬学は東京薬科大学で教わりましたが、薬剤師教育に関しては地元へ帰ってから受けました。上田では薬剤師会がしっかりしていて、地域で薬剤師を育てようとの素地ができあがっており、どこの薬局でも、たとえば薬剤師の担うべき役割や医薬分業の意味など必要な事柄を、先輩の薬剤師がOJTで身につけさせてくれます」



つづく話から、上田の薬剤師教育が上田薬剤師会のインパクトある機能で支えられてきたことが明らかになった。

「薬剤師会が主催する昭和の時代に始まった月例の勉強会『調剤事例研究会』は今もつづき、450回を超えています。発端は、1965年ごろに同年輩数名の有志が始めた勉強会で、1970年から薬剤師会の正式な会となりました」

上田で働き始める「新任」薬剤師のために 薬剤師会が研修を行う。

た。有志だけの勉強会のときは、上田担当のMRを講師として招いて当時のリアルタイムの医療現場の情報を学び、薬剤師会の事業となつてからは、年間数回メーカーの学術担当者に来ていただき、最新製剤に関係した講演をお願いしました。医師に講義をお願いすることもあります。さらに、年に一度は各自がテーマを決めて研究した成果を発表する『学術大会』を開催しようということになりました」

現在、都道府県レベルの薬剤師会では学術大会を催しているところは珍しくないものの、地域薬剤師会レベルではおそらく上田のみ。いかに同地域の薬剤師会の意識が高いかうかがい知れるだろう。

もうひとつ忘れてならないのは、やはり薬剤師会が定期的に行っている「新任薬剤師の研修会」だ。工藤氏からその言葉を聞いたとき、思わず「『新人』ですか？」と聞き返してしまつたが――。

「『新任』です。つまり、大学の新卒者はもちろん、上田で初めて薬剤師として働く人を広く対象とした研修を行っているのです。他の地域でいくら長いキャリアをお持ちであっても関係ありません。上田で展開されている『かかりつけ薬局』のノウハウには、この地域ならではの細部にわたる特徴がありますから」

ちなみに、2015年度の新任研修会は5回開催され、各テーマは、第1回「薬剤師を取り巻く現状と課題」、第2回「情報センターの業務」、第3回「輸液注射の基礎」、第4回「医療材料処方せんの取り扱いについて」、第5回「漢方薬について」だったという。



ここまで聞けば、「かかりつけ薬局」の浸透に上田薬剤師会が大きくかかわっているのは自明だ。

「上田薬剤師会が一貫してめざしたのは、薬剤師による地域社会への貢献です。『現状維持は後退のはじまり』を合言葉に、常に一歩前へと足を踏み出す努力を怠りませんでした。新規事業を始める前には、薬局全体集会などを重ねて、丁寧な説明と意見交換を繰り返し、会員の意識統一が

「上田薬剤師会」を聞く

上田薬剤師会の2016年2月現在の会員数は305名である。1962年に工藤氏が入会したときの5倍ぐらいの数になっているそうだ。ほかの地域薬剤師会レベルの薬剤師会と比較して規模が突出しているのも特徴だが、2/3を勤務薬剤師が占めているのも特筆すべき点だろう。上田地域に住んでいるか、勤務している薬剤師ならば加入できるという規定は、ほぼ全国共通のものだが、実際にはほかの薬剤師会では開局薬剤師がほとんどを占め、広い職域の薬剤師を網羅していないのが一般的だ。

「最近、資本力に任せ、落下傘部隊のようにして開設されるドラッグストアや門前薬局をよく見かけますが、そこで勤務する薬剤師は、会費のかかる薬剤師会へ入会する意識はほとんど持ち合わせていません。なんとか彼らの懐に飛び込んで意識を変えたいと思いますが、心の窓を開けてくれる方はゼロに等しいのが現実です。しかし蛇足ですが、上田では『かかりつけ薬局』の仕組みが根づいていますので、落下傘でやってきた大手薬局チェーンなどの薬局が開局しても、間もなく姿を消してしまいます」

(工藤氏談)

個々の薬局と薬剤師会の緊密な連携と 柔軟な対応があつたればこそ。

できたときにGOサインを出しました」

上田薬剤師会が地域貢献のために実現した新規事業は枚挙にいとまがないが、いくつか具体例を挙げてみよう。

1986年、薬剤師が担う調剤や服薬指導の内容を記録する業務、いわゆる「薬歴」を書くことに初めて保険点数がついたが、上田薬剤師会で組織的に「薬歴」をとり入れたのは、その4年前の1982年だったそうだ。

「最初の説明会では『薬歴とはなんだ?』、『面倒くさい』、『保険点数もつかない』など、ほとんど理解を得られませんでした。しかし、アンケート調査をし、微調整をしながら地道に意見の交換を行い、約70薬局の5分の4ほどの賛成を得られた時点で実施を決めました」

1996年には、休日当番制度と夜間当番制度を発足。事実上の365日24時間体制の開始を果たす。また、2015年には、地域住民に対する質の高いサービスを担保するため、一定の基準を満たした薬局を認定する独自の「上田薬剤師会認定基準薬局」を定め、66薬局が参加してスタートした。もちろん、いずれも合意にいたるまでには十分な議論が行われた。

「個々の薬局や薬剤師会の都合で、『それは難しい、これは無理だ——』とできない言い訳を並べていては、面分業の達成、かかりつけ薬局の構築なども不可能だったでしょう。個々の薬局と薬剤師会の、緊密な連携と柔軟な対応があつて初めて、それらはなされたのです」



さて、気にかかっていたことがある。それは、薬剤師と医師との連携だ。「かかりつけ薬局」の薬剤師が果たすべき役割である患者への適切な服薬指導には、医師との緊密な連携や情報共有が必要とされる。一般的に医師は、薬剤師から処方に関して異議を唱えられることに抵抗を感じる者が少なくない。必要条件のクリアは一筋縄ではいかないように思われた。

「実は上田でも、最初から医師との連携がスムーズにいったわけではなく、上田薬剤師会と上田市医師会の関係には紆余曲折がありました。通称『上田事件』と呼ばれる事件が起こったこともあります」

この事件を簡単に解説しよう。1997年当時、上田薬剤師会内に、もっと薬剤師の意見を薬物療法の処方設計に反映させるべきとする急先鋒の一派があり、薬剤師会と医師会とは微妙な関係にあった。そんな中、薬剤師が医師の処方した薬剤の副作用を含む医薬品情報を患者に文書で説明したことで医師会が態度を硬化、両者の対立が決定的になり、薬剤師会の役員が総辞職するにいたつたという。

その後、医師会からも薬剤師会からも公のコメントは出されなかったが、関係は悪化したままにならずにすんだようだ。医師会は、上田薬剤師会が役員総辞職を決めたこ

「上田事件」——紆余曲折を

経ながらも医師との連携を図る。

とを誠意ある姿勢として受け止め、上田市医師会の呼びかけで医薬品情報問題検討小委員会を開く。同委員会で検討が重ねられ、最終的には「どんな医薬品情報を提供するかは薬局薬剤師に任せよう」との結論に達したというのだ。大きな事件が起きたが、結果的に「かかりつけ薬局」の立ち位置がより明確になったと言っている。いいだろう。「どちらが正しい、どちらが間違っているといった判断はできません。ただ、こういう歴史的な事件があったことを上田の薬剤師たちには忘れてほしくありません。少なくとも当時の薬剤師が、多少過剰だったかもしれませんが、自分たちの仕事に強い誇りを持っていたのは確かなのです」



工藤氏は、かつて薬剤師が強い誇りを持って仕事にあたっていたことに触れた後、今の薬剤師には、その思いが希薄であるのを嘆く。

「日本薬剤学会初代会長で、星薬科大学元学長の永井恒司先生の受け売りですが、医薬品の流れを見ると、医師が処方せんを書く、その処方せんを監査するのは薬剤師、しかし、その薬剤師の仕事は監査する者はいない。つまり、患者に対して薬剤の最終責任を負うのは薬剤師。だから、薬剤師は、究極の倫理観を持つていなければならないと言っているのです。そうした職能を求められているのですから、当然、薬剤師は誇りを持ってしかるべきでしょう。」

けれども、現在、多くの薬局薬剤師は、医師の処方に沿って正しく調剤することだけに汲々とし、残念ながら誇りを持っていないようです」

薬局薬剤師が誇りを持つにはどうしたらいいのか。「すべては、薬剤師の現状認識と意識改革から始まります。」

薬剤師は究極の倫理観を持つべき。

薬剤の最終責任を負うために

誇りを持つものにも、「かかりつけ薬剤師」となるものにも、意識を変えていかなければなりません。単純な調剤作業のみに甘んじず、薬剤師が積極的に行動し、「薬のことは薬剤師に任せる」という常識をつくり上げねば、社会からの信頼は得られないのです。私は、上田薬剤師会の会員には常に「**ずく**、出せ、汗かけ」と言いつづけてきました。今、日本の薬剤師の皆さんに言いたい言葉です」

「**ずく**とは長野県の方言で、正確な標準語に直すことはできないようだが、**やる気**や**根気**に近い意味の言葉だという。上田で「かかりつけ薬局」が根づいているのは、それが生まれる以前から今まで、薬剤師たちが**ずく**と**ずく**を持ちつづけてきた継続の力でもあるのだ。」



PROFILE

- くどう・よしふさ
- 1958年 東京薬科大学卒業
中外製薬株式会社
 - 1962年 河合薬品株式会社カワイ薬局
 - 1987年 地域密着型の薬局をめざして
薬剤師仲間と有限会社カネサン設立。取締役として在籍
 - 1994年 上田薬剤師会会長
 - 2000年 長野県薬剤師会会長
 - 2004年 日本薬剤師会副会長
上田薬剤師会顧問
長野県薬剤師会顧問
 - 2005年 セルフメディケーション推進
協議会副会長
 - 2008年 日本薬剤師会相談役